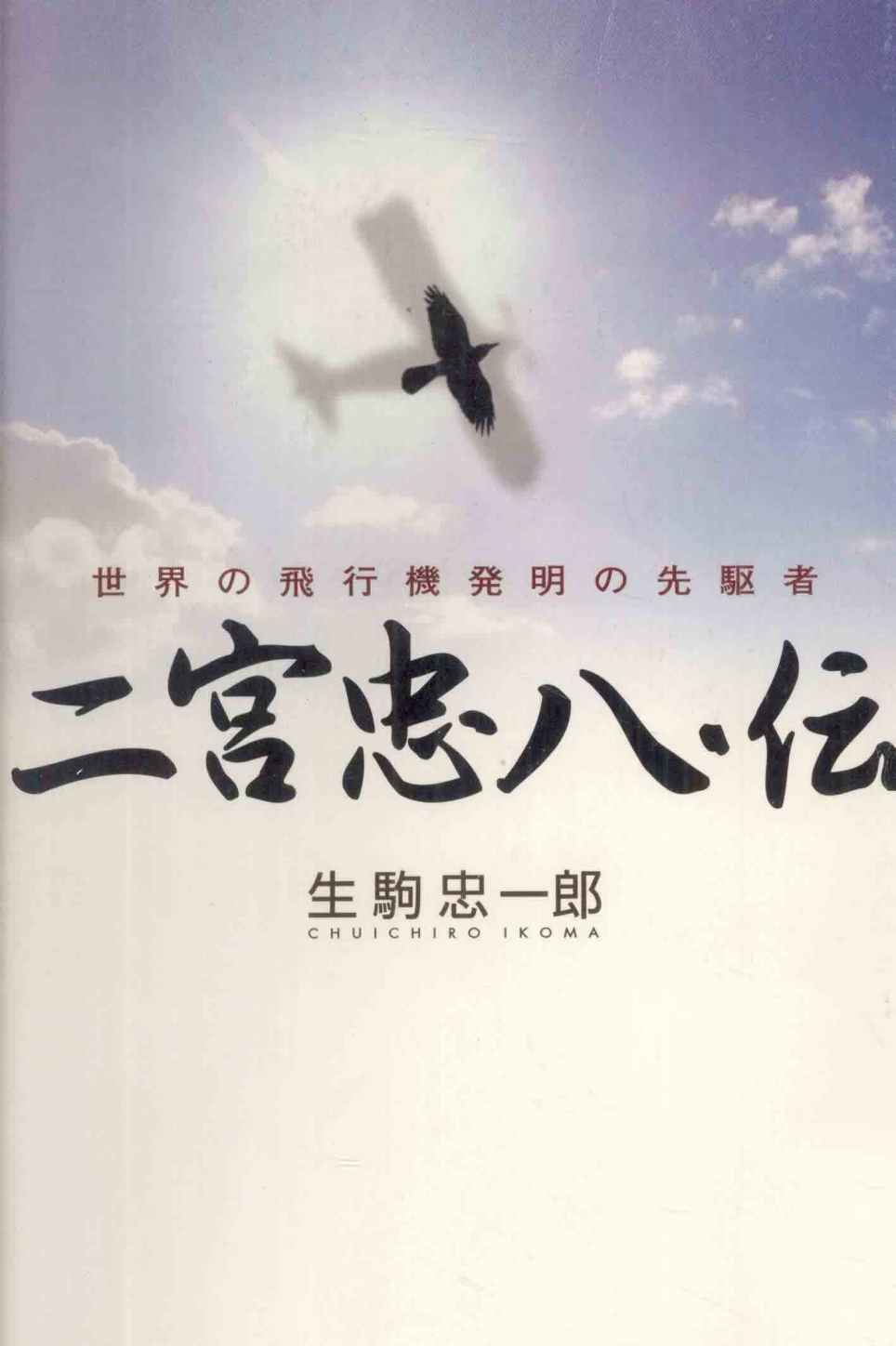




世界の飛行機発明の先駆者

二宮忠八・伝

生駒忠一郎

CHUICHIRO IKOMA



世界の飛行機発明の先駆者

二宮忠八・伝

生駒忠一郎

CHUICHIRO IKOMA

著者紹介

生駒忠一郎（本名 川田 正）

1938年、香川県仲南町生まれ。龍谷大学文
日本文芸家クラブ、日本放送作家協会、日本脚本家連盟
所属。イオンド大学（アメリカ）歴史学名誉博士。
（株）キリツボ企画代表取締役。愛知県保護司。

著書は『名古屋歴史散策』（保育社）『戦国鶴の軍団』
（郷土出版社）『帰雲城燃ゆ』『戦国焼野の騎馬軍団』
（八重岳書房）『炎の奇跡』（中部経済新聞社）
『軍議など無用』（エフエー出版）『掠鳩十の生涯 風のとく』
『幻の埋蔵金 佐々成政の生涯』『海賊大將軍
の埋蔵金』（KTC中央出版）『モンゴル大草原の青い星』
（岩崎書店）『バガン平原の白いトラ』（人間社）等多数。

世界の飛行機発明の先駆者

二宮忠八・伝

2002年11月6日 初版第1刷発行

著 者 生駒忠一郎

発行人 前田哲次

発行所 KTC中央出版

〒460-0008 名古屋市中区栄1-22-16

TEL 052-203-0555 振替 00850-6-33318

〒163-0230 東京都新宿区西新宿2-6-1-30

TEL 03-3342-0550

印刷所 竹田印刷株式会社

乱丁・落丁は、ご面倒ですが、小社までお送りください。

ISBN4-87758-260-6 C0095

© Chuichiro Ikoma 2002 Printed in Japan

世界の飛行機発明の先駆者

二宮忠八・伝



もくじ

ふるさとの海……………	7
夢のトビウオ群……………	14
長男の失敗……………	20
家運傾く……………	28
初孫にゆらぐ父……………	34
変な子……………	40
家庭崩壊……………	48
助けの手……………	55
父の死……………	59
嵐作りに熱中……………	66
不思議な気球嵐……………	74
花びら散る風車嵐……………	83
魔術、天から降るちらし……………	89
カラス舞う樅の木峠……………	96
抵抗がものを押し上げる……………	105
ついに飛んだ！……………	118

心をこがす人……………	131
地獄の大陸戦線……………	138
生死をさまよう……………	150
軍を退く……………	158
金刀比羅宮の神に誓う……………	167
天気晴朗なれど……………	176
京の都の八幡の里……………	184
衝撃のライト兄弟……………	189
模型飛行器を破壊……………	195
最高責任者に……………	203
胸痛む飛行実験……………	210
先駆者の悲しみ……………	217
犠牲者第二号……………	224
白紙からの再出発……………	233
栄えある日々……………	239
桜散る石清水の夜……………	245

文中では、著者の意向により
「飛行器」と「飛行機」の使い分けをしています。

表紙デザイン
編集・制作

ライツアソシエイツ
ライツアソシエイツ
丹羽健二（デザインハウススクロップ）

世界の飛行機発明の先駆者
二宮忠八・伝

生駒忠一郎

ふるさとの海

黒潮のうねる晩秋の伊予の宇和海に弱い稲妻がひらめいていた。雲はほとんどなく、夕茜の薄れる空を雁の列が渡っていく。

大気は異様なほど澄み、西の空には宵の明星が輝き始めていた。

十月の初め、私は尾道から因島、伯方、来島海峡と、瀬戸の島々をぬうしまなみ街道を通って伊予路に入った。

そこはかつて、村上・来島・河野といった瀬戸内水軍が活躍した世界で、荒れ気味の海の波の中に、何度も、海賊衆の雄たけびを聞く思いになった。

「古事記」によると、天地創造のとき、四国は淡路島について二番目に生み出された土地である。その中の伊予はイユ、つまり「湯のある国」という意味である。「湯」とは、道後温泉のことで、おろくぬしみと 大國主命・景行天皇・聖德太子も来湯したと伝えられる。そうした、為政者がよく道後を訪れたのは、療養と共に、朝鮮や九州平定の作戦を練る場所を選んでいたためである。

伊予人の気風は南に下るほどのびやかになるというが、道後から車で約二時間、佐田岬の付け根に広がる八幡浜はことにおおらかであった。

そのあたりは、かつては瀬戸内を代表する河野水軍の勢力下で、屋島や壇ノ浦の平家追討や、和寇、八幡船として名を高めた土地であった。

養老年間（七一七～二四）からある八幡浜の名は、この土地の古くからの武人の神の八幡信仰を伝えるもので、海に生きてきた尚武の土地を象徴している。

「この八幡神社は、養老元年、近くの海に降臨した応神天皇の御霊をお祀りしたのが始まりです。ことに、河野水軍の信仰があつたんです。鎌倉後期の蒙古襲来の文永・弘安の役とき、河野水軍は、この八幡神を奉じて敵船団に立ち向かい、多くの武功を立てて伊予全土を与えられたんですよ」

宇和海を望む愛宕山あたごに立つ神社で聞いた古老の話である。ここはまた、世界の飛行機発明の先駆者、二宮忠八のふるさとでもある。

幕末に生まれた忠八は、陸軍に入隊中、カラスの飛ぶ姿にヒントを得て、ライト兄弟より十二年も早く模型飛行機を作り、飛行を成功させている。そのとき、もし忠八に、十分な資金力と後援者があれば、世界初の人を乗せて飛ぶ飛行機を完成させていたであろう。

「世界の隠れた航空史の主人公」と言われる忠八は、明治を二年後にひかえた慶応二年（一八六六）年六月九日、八幡神社下の矢野町で海産物問屋大二屋を営む二宮幸蔵の四男として生まれた。初めは忠人ただひとという名であったが、商人の子らしくないというので、一年ほど後に忠八と改名した。

忠八には、繁蔵・千代松・栄吉の三人の兄と姉のおまつ、そして、象太郎という弟がいた。

「二宮家の先祖は薩摩藩藩士であったのじゃが、茂左衛門利忠という人が分家して伊予国大洲おおすへ渡り、大洲藩の加藤家に百五十石で召しかかえられたんじゃ」

先祖は武士であったという幸蔵の自慢話だったが、その後がいけなかった。

利忠の子の佐兵衛忠幸の代になってまもなく、二宮家は思わぬ不運に襲われることになった。

二宮家が保管責任者になっていた藩主の紋入りの旗がネズミに食い破られて謹慎になったのである。

ようやく許された宝暦二（一七五三）年七月、今度はその旗や幔幕まんまくを保管してあった蔵が火事になり、すべてを焼失してしまった。

そのとき、忠幸はアユ釣りに出ていた。

そこでまた責任を問われ、藩を離れて百姓になった。そしてその後、商人に転身し、海産物を扱う大屋を興した。

「昔から、二宮家でアユを食べないのは、こんなことがあったからじゃよ。ばかな話じゃがな」

幸蔵は、こんなことを言って苦笑いしていた。

三方を山に囲まれた八幡浜は、西の宇和海に向かって開けた漁業の里であった。

平家全盛時代の中世は池大納言の莊園、矢野莊であった。その後、河野水軍の勢力下で武名をとどろかせ、藩政時代には宇和島藩に属した。

宇和海をへだてた九州の大部分や京阪神とは船で結ばれていた。二宮家は、そんな地の利を生かして手広く海産物の卸しや小売り問屋大二屋を経営し、何人かの人を使つて八幡浜でも指折りの素封家になつていた。

父の幸蔵は、商売のかたわら、町の日那衆によくある見世物や旅役者の芝居を呼び寄せてみんなを楽しませる道楽があつた。

廃藩置県が実施された明治四（一八七二）年一月、忠八が四歳になったとき、幸蔵の耳に、象の見世物が、四国へきているという噂が聞こえてきた。

そこで、幸蔵の興業趣味がうごめき出した。

「そつか。このあたりで象を見たという人はないだろうな。八幡浜は、ことに好奇心の強い人が多い。一つ、骨を折つてみるか」

そこで幸蔵は象の興行師と契約して十一月二十二日の夜中に町へ連れてくることにした。

昼、象を引き入れては、興業前にみんなに見られてしまうからだ。

計画どおり、真夜中になつて、興業師一行と、黒い布をかぶせた象を町へ入れた。

その象が、忠八の家の前を通つたとき、ちょうど弟がうぶ声をあげたので、象太

郎という名をつけるおまけまでついた。

興業の内容は豊富であった。

「たらい回しの足芸を披露する女芸人や、とんぼ返りをしたり、舞いを舞ったり、滝のぼりをしていた鯉が急に龍に変身するといったからくり人形も出るんだぞうだ」

こんな評判がたつた。それらの芸と共に地上最大の動物の象を一目見ようと、遠くから大勢の人が押しかけてきた。

ひざを折り曲げ、頭を下げておじぎをする象や人間と同じように体を動かし、表情まで変えるからくり人形の不思議さは、まだ四歳であつた忠八もよく覚えていた。興行師達は忠八の家に泊まつた。その夜の家は祭りのときよりもにぎやかになった。

忠八や近所の子ども達は、夜、何度も、興業小屋の近くへ行つて象の気配をうかがつた。

闇の中に、あの大きな動物がひそんで動いていると思うと、気持ち異常なほど高ぶつてきた。

興業は大成功で、幸蔵の太一屋の名も一段と広まることになった。

この年の暮れ、二宮家は、八幡神社下から近くの旧代官所前に引っ越した。

夢のトビウオ群

なだらかなミカン山から宇和島の海へ、うろこ雲が白銀の光をたたえて広がっていた。

昼を過ぎて、輝きを増しながら広がる雲を背景に、赤トンボがさざ波のように群れ飛んでいる。

すっかり秋の深まった海を見下ろす愛宕山の松林で、五歳の忠八は、二人の友達と、羽を光らせて飛ぶバツタを追うのに夢中になっていた。

午後三時を過ぎたころ、愛宕山の頂にある物見槽やぐらで、ほら貝がボウボウと鳴り出